

桜見通信

2014 no.32

題字♡marina

イラスト♡emoto Fuyu

sakurako tsu-shinn

百人一首には謎がある！？ (1)

今年度も恒例の「源平合戦」が近づいています。我が校の風物詩としても「百人一首」は定着してきましたように思われます。この季節を迎え、あらためて歌を詠んでいるといつも疑問に思うことがあります。それはこの歌たちはどのように選ばれたのであるかということです。

百人一首には不思議なことがたくさんあります。その大きなものの一つに、「歌や歌人の撰び方がどうも変だ」と昔から言われています。たしかに百人一首はどれも名歌であることが疑いようはありません。百首のうち九十八首までは、「勅撰和歌集」に収録された歌であって、その意味では皆ある一定のレベルの歌から成り立っていることもたしかです。

しかし、歌の名人・定家が、何千何万という歌のなかからよりすぐつた百の歌だというのに、思わず首をかしげたくなる、あまりにも「平凡な歌」が多くすぎる、ということが、和歌や国文学の専門家によつてしばしば指摘されてきました。このことを予想していたかのような、この謎を解く重要な手がかりとなるものを定家は自身の手で書き残しています。それは、百人一首の姉妹篇にあたる百人秀歌（1951年に発見された）につけられた次のように「奥書き（おくがき）」の文章です。

『上古以来の歌仙の一首 思ひ出づれ』とひいて「れを書きいだす。名譽の人 秀逸の詠、皆漏れを漏らす。用捨は心に在り。由他の傍難あるべからずか。』（上古以来歌仙一首 隨思出書出づ。名譽之人 秀逸之詠、皆漏れ。用捨在心。由他不可有傍難歟。』

意味は、「上古からの歌仙の歌を一首ずつ、思い出すままに書いた。このなかには、歌の名人と誉れ高い人の秀逸な歌と

いわれているものが、ほとんど漏れている。けれども、どの歌を用い、どの歌を捨てたかの選択基準は私の心の中にある。ほかの人間がいろいろと非難することは意味のないことだろう」という。「奥書き」は、この歌集の歌の撰択の仕方について後世の人々が必ず疑念を抱くだろうということを、あたかも予想したかのように語っています。こうして、この歌集が普通の歌集とはちがつた、ある特殊な歌集は何だったのでしょうか？

たとえば晩年の定家は、新勅撰和歌集を編纂するにあたつて、新古今和歌集の、技巧をいっぱい散りばめた、きらびやかな歌風をしりぞけ、深沈、重厚な歌を重んじたといわれています。百人一首の歌撰びの『心』も、そういう意味だったのでしょうか？

（次号予告）

百人一首は、これをタテ十首、ヨコ十首のわく内に、ある特別な順序で並べると、隣りに来る歌どうしが上にも下にも右にも左にも、何らかの共通語をふくみ合うことによつて、一つの隙間もなしに、全部ぴったり結び合わされるという奇想天外なしくみをもつてゐる、と言われています。次号は日本の古代・中世にあらわれる歴史の裏側事情などを表した詩の世界の話です。

うみなし 編集後記 雪舍寒九

今から楽しみにしている一本の映画があります。

それは・・・今からそう遠くない未来。サンフランソウキヨウに住む十四歳の少年ヒロ・ハマダは最愛の兄タダシと、タダシの恩師で、尊敬するロバート・キャラバン教授を火災事故で失つてしまふ。幼いころに両親をなくし、たつた一人の家族も失い、心を閉ざしてしまつたヒロの前に現れたのは白くて風船の様な見た目のロボット、バイマックス。彼はタダシが生前、最後に作った『心と体を守るケアロボット』で戦闘能力も戦闘意欲も持たない心優しいロボットだつた。日本アニメの金字塔「トトロ」を彷彿させるキャラクターはとても戦えるロボットではない。ロボット工学の天才少年ヒロはベイマックスと「悪」にどう立ち向かい、戦うのか。兄タダシがベイマックスに託した本当の使命はなんだつたのか。今から楽しみです。最近の3Dはすごくキレイで、思わず避けてしまうほどに立体なんです。（雲）

Yasashisa de
Sekai wo Sukurekka

えるのです。これだつたらなにも「名誉の人 秀逸の詠」を「皆これを漏らす」必要など少しまないからです。秀歌をあつめようとした歌集ではないのだ、という定家の説明は、要するにこの歌集が和歌本来の歌としての出来ばえ以外の何かを、撰択の原理としたのだというふうにしか解釈できません。とすれば思い浮かぶのは、和歌の世界でさかんに行なわれていた言葉遊びの存在です。おそらく定家は、百人一首に何かの言葉遊びの技術的なシステムをくみこもうと考え、それに適合した歌を撰んでいったのではないかでしょうか？しかしそれが本当に「遊び」の範疇（はんちゅう）だったかはわかりません。

（雲） 次号に続く

正倉院文書の魅力と難しさ

手元に今年の正倉院展の図録があります。

正倉院展は、戦後の復興の中で、祖先の残した偉大な文化を公開し、国民を力づけ、国家の再建に役立てようという趣旨で開催されたものです。第一回正倉院展は戦後間もない昭和二十一年（1946年）のことでした。この時の観覧者は250日間で延べ15万人を数えるという好評ぶりで、以後毎年開催されて今日に至っています。今年での回目になるようです。いつも正倉院展に行くときには、様々な宝物もさりながら、正倉院文書を見、読むことを楽しみにしています。そこで、今回非常に知的好奇心を刺激された文書を紹介してみたいと思います。そして、文書の楽しみ方の一端を紹介してみたいと思います。

正倉院文書は写経所文書を中心としますが、そう一筋縄、否、二筋縄・三筋縄ではいかない文書です。紙には表面と裏面があるが、表面は国家が様々な行政文書作成のために使用する（一次文書）。その文書が不要になつたら、写経所に送られ、適宜紙を切断して、何も書かれていない裏面に別な内容が書き込まれます。これが写経所の文書（二次文書）。当時、紙は非常に貴重であつたから、そういうエコな使い方をしたのは理解できます。しかし、問題は、正倉院文書の写経関係の文書は、幕末から明治にかけて行われた特殊な整理を経て復元されたものだということです。簡単に言うと、一次文書を復元するために、二次文書の中から該当箇所を発見し、それを貼りついで巻物にしたのです。二次文書からみれば、破壊されたということになります。したがって、正倉院文書を使つて何かものを考えようとするならば、破壊された二次文書を復元しなければなりません。その作業はあまりにも難しく、漸く私も勉強を始めたところです。今回正倉院文書を見て思つたのは、よく筆跡にその人の性格が現れると言われますが、筆跡と性格は矛盾することもあることです。律令国家にとって大切な戸籍（上）と奈良時代の独裁的政治家藤原仲麻呂との筆跡（下）を比較すると、随分と藤原仲麻呂は丸い文字を書く（柔らかい性格？）のだなどいうことが分かります。そのギャップが非常に面白い。

鶴笙

課戸

藤原忠義

8世紀の紙の文書で、正倉院文書のように現存するのは、世界的にみても、稀有なことです。しかし、それらの文書の裏には文化財の破壊という事実が隠されていることを忘れてはならないと思います。そう考えると、世界的に稀有であるとばかり言つてはいられなくなります。古文書という文化財の保存自体に相反する性質が内在しており、もはや純粹な保存という形で正倉院文書が現存する訳ではないとする、得も言われぬ気持ちになります。

子曰。君子成人之美。不成人之惡。小人反是。

（顏淵第十二 16）

《口語訳》

「君子は他人の美事善事を援助し完成するが、他人の悪事は、援助し完成しない。小人はその逆であつて、人の悪事の尻押しをし、人の美事を妨げる」

吉川幸次郎

この文章は私たちに何を教えてくれるのでしようか？この教えを深く理解するため、論語にソクラテスをぶつけてみたいと思います。ソクラテス曰く、「人は誰一人として、みずから進みて悪事を行う者は無し」と。ここに君子と小人との決定的な違いが確認できます。みずから進んで悪事を行うか否かの境界線をたやすく踏み越えるか否か、という違いがあるのでないでしょうか？たつた一本のラインですが、そのラインを踏み越えるものとそうでないものとは、まったく違うということを考えなければならぬのではないでしようか？

鶴笙